



クトウルフ神話
TRPG短編「さまよ
う檻」

ユキ・オトコ

舞台は現代日本。

大都会のど真ん中で人の死体が発見される。死体はひどく損壊していて、首から上がまるでそぎ落とされたかのようになくなっていた。幸い、手持ちの身分証明書から彼の正体が判明している。

被害者は死体が発見される数日前行方不明の遭難届けが出されており、少なくとも連絡が取れなくなっていることが明らかになっている。しかし一番不可思議なのはその被害者の首から上を切断した物体の目星が見つからないことである。

識者は監禁され食事を与えられずに衰弱したところを殺害された様子で、犯人に死骸を弄ばれたうえで路上に放置されたものだと判断している。しかし、死体の第一発見者が不思議なことを証言していた。

「死体が空から降ってきた」「空を見たら、巨大な鳥人間のような存在が見えた気がした」と。探索者は興味本位でこの事件についての情報を集めるため、事件のあった現場へと足を運ぶのであった。

登場人物

被害者：生前はそこそこ美形であったと言われている。顔を損壊しており見ることはかなわないのだが。被害者恋人とは度々衝突していたものの、良いカップルと認知されていた。

被害者恋人：被害者の捜索届を出した人物。彼の失踪の前後から精神的に不安定になり現在入院中。被害者が死体で発見され報告された際は、彼の死因を聞いて絶叫している。その後「私が彼を殺した」とつぶやくようになった。実は過去にも摂食障害で通院。何かにつけて装飾のリストを触る癖がある。

病院入院病棟：恋人の状況を教えてくれる。最近摂食障害から重度な精神衰弱状態に陥り入院措置を取る患者が増えていることを危惧している。そのうちの何人かは事件の発生（発覚ではない）前後で突然発狂したり、吐しゃ物をのどに詰まらせて死亡したりしている。

第一発見者：探索者に「空から落ちてきた死体」と「人外の化け物」の話をする。

警察：捜査に聞き耳を立てれば有力な情報源になるかも。しかし、一般人を危険から守るために探索の障害になることも。

運送屋：事件の前後に現場付近で目撃されている運送屋さん。簡単な取り調べを受けていた際にトラックの中を見られ、中から相当の血痕があったことから被疑者として抑留されている。しかし当人は「大きな石を運んでいただけだ」と容疑を否認している。

石職人：運送屋と懇意にしていた職人。大きなモニュメントから、小さな装飾品まであらゆるものを作る。今回の事件で運送屋の証言を裏付ける証拠として石の運送依頼書などを警察に持って行っている。また、事件被害者の恋人とも「彼女はお客さんだから」と何かしらの縁がある模様。

あらし

探索者は、事件の様子をネットである程度知っている。

その後、興味本位で被害者の恋人や第一発見者などから証言を得る。

また警察では第一被疑者としてとある運送屋の人間に注目している。

運送屋であり、トラックを所有していること。現場付近で目撃情報があること。そして極めつけは被害者の血痕がトラック内にちりばめられていたこと。

しかし運送屋は石職人に依頼されて石を方々へ輸送していたことを証言して容疑を否認している。

探索者は石職人のもとを訪ねても良いし、図書館やパソコンで最近のニュースを調べても良い。

分かることは、運送屋の疑惑はあくまで状況証拠のみであること、凶器は判明していないこと、そして石職人が大きなものだけでなくアクセサリーなどの小さいものを扱っていることを知る。

石職人のアクセサリーと被害者恋人の持つリストが酷似していると気が付いた探索者。

再度病院を訪ねるか石職人のアトリエを訪ねても良い。

病院では急に狂暴化した摂食障害の被害者たちが探索者や病院の医師や看護師に噛み付いていた。

それを何とか退けた探索者は被害者恋人のもとにたどり着くが、被害者恋人の元には人外の怪物、ガーゴイルが迫っており、彼女を飲み込んでいる状態だった。ガーゴイルはそのまま飛んで逃げるが、車等で追えば決して追いつけない相手ではない。また、その行く先が石職人のアトリエである可能性についても事前に情報を手にしていた場合わかってても良い。

先に石職人のアトリエへと向かうと、石に生命を吹き込み意のままにあやつる技術に魅せられた石職人の手記を手にする。そこには、恋人の飢えに対する異常性と無機物に生命を吹き込む魔術を組み合わせた石造の生物の使役についての研究が記されていた。そうこうしているとガーゴイルとともに石職人がやってくる。勿論この時すでに被害者恋人はガーゴイルの中にいるのだが、このルートで探索者がそれに気が付くことはできないだろう。

いずれにせよ、石職人のアトリエで探索者は石職人と対峙する。

石職人はガーゴイルを防壁兼捕獲機能として活用。ガーゴイルは今までに集めた精神力を耐久値とする。HP2d3（人数）*3d5（精神力）が妥当か。基本的にガーゴイルの性能はかばうことに特化（複数回発動可）しており、物理半減（石のため）が付与される。しかし、吸収した精神力の源泉が飢えであるため、食べ物がある空間において行動判定には（-20）の修正がくわえられる。

石職人に一定のダメージを与えるか、ガーゴイルを戦闘不能にする、もしくは一定時間が経過すると戦闘終了。

石職人ダメージによる戦闘終了の場合、石職人はガーゴイルに対する支配力を失い飢えに支配されたガーゴイルによって首をかみ切られる。

その際に、ガーゴイルの中に被害者恋人がいることを知っている場合はガーゴイルの内部から彼女を救出しても良い、その際は彼女の体重とガーゴイルの抵抗力の合計値 $3d6$ （体重 $2d6$,抵抗 $1d6$ ）と筋力対抗をする。成功した場合彼女を救出できる。ベストエンド。

筋力対抗失敗、および彼女が飲み込まれていることを知らない場合、石職人の魔術によって無視されてきた科学的現象が発露し恋人は石造内で圧死する。血に染まった石像が次なる養分として探索者を求めて蠢きながら徐々に崩れていく様を見て終了。ノーマルエンド1。

ガーゴイルを戦闘不能の戦闘終了の場合、ガーゴイルから恋人を救出できるが興味を失った石職人は姿を消してしまう。非日常的な現象の連続に被害者恋人が耐えられることはできず精神が崩壊。世間では石の中から死体が発見されるという異様な事件が度々起こるようになって終了。ノーマルエンド2。

一定時間の経過による戦闘終了の場合、ガーゴイルは被害者恋人を探索者の前で食べ始める。その光景を目にしながら石職人の仕掛けた魔術によって意識を昏睡させる探索者たち。気が付くとそこは病院の中で、保護した警察の話によると被害者恋人の死体を前に倒れていたそう。詳しい事情は快復してからだと警察が去った後、幻覚をみることになる。あの意識が混濁した後、自分たちが被害者女性の死体にむさぼりついているのを見るのだった。バッドエンド（グールエンド？）。

被害者恋人は、被害者の理想を体現するために過度な節制を実施していた。被害者が好きな恋人は節制に耐えられるようにおまじないに手を出すようになる。あるとき、石職人が特別にこしらえた「身に着けると飢えが和らぐ」という装飾品を購入し、それを身に着ける。

この装飾品は装着者の「飢え」と「精神」を徐々に吸い出す抽出器の様なもので、すでに何人も人間がガーゴイルの原動力として精神を吸い上げられており、今回の被害者恋人の歪んだ精神力が今回の事件の発端であり、ガーゴイルの始動でもあった。

ガーゴイルは衝動的に被害者を体内に閉じ込め、被害者の精神と送信機から得た被害者恋人の二つを摂取するようになる。最終的には被害者の肉体そのものを少しずつ齧るようになり、被害者を死に至らしめた。ちなみに被害者女性が捜索願提出後に急激に心身衰弱状態に陥ったのは、彼女が夢で贅沢な食事をするという禁忌を犯している快樂と被害者が徐々にちぎられていく過程（ガーゴイルの視点）を見るという悪夢に悩まされたからである。

石造の魔物ガーゴイル

有翼の怪物や、立方体など石の容量を超えない程度に変幻自在な怪物。吸い上げた精神力の源泉が飢えであるため、人型状態で人間の食事を見ると行動が鈍るという欠点がある。

始めは何もできなかったが石職人の手によって支配され、現在は石職人の忠実なゴーレムとして活動する。

何も知らぬ運送屋が運ぶ資材として街中をさまよっていたが、魔術的な強化を施されて飛べるようになり、運送屋の助力を必要としなくなった石職人が運送屋を容疑を向かせるためにわざとトラックの中に血痕をばらまかせ、死体をわかりやすい位置に破棄するよう指示。

結果今回の事件が発覚した。

クトゥルフ神話TRPG短編「さまよう檻」

<http://p.booklog.jp/book/95813>

著者：ユキ・オトコ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/cthulhutrpg/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95813>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95813>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ